国寺の杜に「従一位大勲位侯爵大隈重信墓」として、また、佐賀市赤松町の竜泰寺に眠っている。

大隈のもたらしたリハビリテーションは今日的観点からも意義があると考える。

（平成十年二月例会）

眼科医療器械史のCD-ROM化

奥沢康正

筆者は主に二つの理由から眼科医療器械史に関心を持つようになった。

一つは、鍼を立てる（白内障墜下術）術者の持つ大きな金鍼（メス）と女性助手の持つ大きな塗り碗（膿盆）が描かれた、眼科手術を描いた写実的な最も古い描写画「病草紙」の「目の少し見えぬ男」に触れたこと。

もう一つは、第100回日本眼科学会で一般公開された「百周年記念歴史器械展示」の展示委員として、資料保存と眼科機器のオリジナルを求めて所蔵調査に協力し、さらに記念事業として発行された「日本眼科学会百周年記念誌」の編集委員を兼任したことである。

所蔵調査の結果、これらを保管していると一般に考えられる大学などでは、医療器械類の新旧入れ替えに際して廃棄されることはあっても、現時点で古い器械類を保存していく体制は整っていない。

諸外国の眼科医療器械保存の現状ではドイツのIngolstadtにあるGerman Museum of the History of Medicineでは、個人のコレクションから発して、現在は財団法人として保存管理され、所狭しと展示された多くの眼科器械はそれぞれ完璧に整備され、今でもすぐに使用できる状態で保存されていたことに驚嘆させられた。

筆者のコレクションは個人の私的な所蔵品であり、膨大な量に対し後日の学究対象として効率的な分類がなされているとは言い難く、また個人の物理的、経済的限界から最良の保存、公開の方法が採られていない現状が一方にある。保守管理の点からも、個人が永続して保存するには限度がある。これらのコレクションは、ドイツの例を見るまでもなく本来は公的機関に準じた博物館設立というゴールを目指すべきかとは思うが、個人のレベルでは実現への道程はまだまだ遠いように思う。

そこで、(1)眼科器械保存の現状、(2)眼科器械発達史の文献検索法、(3)眼科器械保存の難しさ、(4)個人レベルでの保存法の各項について述べ、最後に(5)CD-ROM化として、器械の一つ一つが三次元的にビジュアル化され、器械の使用法などを含め多くの項目によって検索ができるバーチャルミュージアムとしてのCD-ROM作成を考え、この経緯を述べた。筆者の蒐集した史料に掲載された全ての器械写真を基にして、これを分類整理し、さらに一つ一つの器械史料を添えてカタログ

化すると共に、大学や個人及び筆者自身が蒐集保存してきた器械を新たに撮影して前述史料に貼付してCD-ROM化した。

バーチャルミュージアムとしてのCD-ROM化にとって最も重要なことは如何に鮮明な器械写真（ビジュアル）と豊富な解説資料（スクリプト）を充実させるかという点と、これらを取捨選択し、如何に見せるかという点に絞られる。撮影したフイルムは約三千枚となり、これらの各写真の史料は資料目録に記録された全ての項目から呼び出せるようにプログラムし入力した。カード化した資料採集の目的とコメントの記入欄には器械の用途目的、構造と作動原理、長所と欠点、耐久性、形状、大きさ、重量の他、発売時の宣伝文句、場合によっては発案、改造にまつわる経過や苦労話、私蔵の器械の場合はオリジナル製が何処まで保たれているかなどを採録した。

眼科医療器械史をCD-ROM化する中で、特に感じたことは、明治初期の暗室灯や検眼鏡は、原始的なローソクや石油ランプの光源の利用から、より強力なアセチレンガス灯、炭素アーク灯、白熱灯、さらにクセノン、ジルコニウムなどの光源を利用し、精密光学器械へ発展していく検眼鏡とその後の細隙灯顕微鏡の二大発明によって今日に至る眼科学の進歩の歴史を見ることが出来る。

そして、この医療の進歩を支えた器械の歴史には第一次、第二次世界大戦による国内軍需光学機器の発展という戦争の影響や、また高度成長が医療経済に連動したように経済の影響、さらには昭和五十年代を境にコンピュータ化が促進されるという科学技術の影響など、医療を取り巻く社会の様々な影響を受けて大きく変革していったという事実である。

それはあたかも幕末から明治にかけて吹き抜けた日本の工業化という一陣の風が、洗眼治療主義（Red eye clinic）から検査主導型（White eye clinic）へと一度期に開花させたことに重ね合わせられるように思う。

筆者は幸いにも多くの医療器械がその性能を一新させ、旧型機器が何ら顧みられることなく廃棄処分となる新旧交代の激動変化する時期に、京都という、古い器械が比較的多く残されていた土地に在住し、多くの大学や医療機関から貴重な資料機器を提供していただける知己を得て、医療器械史に関心を持ち続けることができたことは幸運であったように思う。そして、ご協力いただいた、その他の多くの大学、開業医の先生方に深く感謝の意を捧げるものである。

CD-ROMを作成する過程で、医療器械の発展には医師だけでなく多くの科学者の才能と英知が関与し、それに医療機器メーカーの企業意識のたゆまない努力によるものと深く実感することができた。

（平成十年三月例会）